
魔法使い聖夜！

ナズン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い聖夜！

【Nコード】

N8464Y

【作者名】

ナズン

【あらすじ】

ある日、俺は死んだらしい…
神に願い事を3つ叶えてもらい
そして『魔法使いネギま！』の世界に送られた
そこで俺は…

プロローグ

「え？ここは…どこだよ！」

起きた場所は白い空間

俺の名は『桜・聖夜』（17）高校生…だよな？

「ああ、そっじゃよ」

え？誰？

目の前には爺さんが正座で座っていた

「あ、あの誰でしょうか？」

「ワシは神じゃ」

正座で真面目な顔で言ってきた

「では、神様、俺は何でこんなところに居るんだ？」

とりあえず、何でこんなところに居るか知りたいんだ

「死んだ、むしろワシが殺してしまった」

「へ？まあー死んだと思ってた…けど、殺した？」

「それはな…ワシがタバコを吸ってたら落としてしまっただけで君の家が…」

「おまー！！ひどー！！」

「だから、責任の為、転生をさせよう」と

「へえー、どっかに送ってくれるん？」

「場所は『魔法使いネギま！』じゃ」

ネギまつと言うと魔法か

まあー元の世界は暇で退屈だったからな、刺激沢山だろう

「何か、力とかくれる？」

「そりゃーそうじゃ、3つ叶えてやるわ」

それは助かる、元々のステータスが低いのだ

「1つ目、魔力無限」

どうせなら魔法を最大に使いたいのだ

「2つ目、俺のステータスマックス」

俺は運動音痴と知識が低い

「3つ目、あらゆる魔法を使える・・・後、魔法知識が欲しいんだが・・・」

問題があった、魔法の制限を封じる為に、あらゆる魔法を使える力が欲しい・・・だけど魔法知識がないんだ

「1、2、3の事をかなえよう、だが・・・4つ目か・・・まあ、謝罪だ、叶えよう」

爺が、何かブツブツ言ったら、力があふれてきたマジで叶ったのかよ・・・スゲー

「さて、送るぞ、話すのが疲れてきたのじゃ」

え？

「ちょ！まてまて！」

「ん？なんじゃ」

「俺を送ってくれるのは嬉しいけど、向こうでは俺はどうなるの？」

そう、不安なのは俺はどういう扱いになるのかだ・・・無職？いやだ！

「ああーそうじゃった、向こうでは、君は数学の飛び級先生だ」

へ？先生？俺が？

「えっと・・・俺は、そんなに知識が・・・」

「めんどろじゃの〜わかった、基本的な高校生クラスの知識を君に送る」

「やった！」

「あい、言ってこいやー」

ちよ、態度変わった！

穴が相手落とされた

プロローグ（後書き）

次回は主人公設定を・・・

主人公設定（前書き）

サブタイトルが単純すぎ笑える

主人公設定

桜 聖夜

さくら せいや

17歳

身長 170cm

体重 65kg

性格

鈍感 気分で動く 小さい人スキー

世話役のスキー

でも面倒事ヤダー

基本的に楽しければ何でもする

人と気軽に話せる

顔は79点

痩せてる

見た目は貧弱に見える

HPというか体力はマックス（フルマラソン余裕でクリア）

魔力無限（1000年戦争できるくらい）

知識 数学高校生クラスまで暗記できてる 基本的に何でも覚えれる（絶対暗記能力）

運動 教えてくれるなら何でもできる（天性の運動力・感）

魔法知識 何でも覚えてるし 何でも使える（チート能力）

主人公設定（後書き）

はい、チートですね

基本的に神によってチートさんになっています

本人は気付いてないけど、全部の言葉も覚えてしまってます（これで、外国も余裕）

神いわく「面倒だったから全部の言葉の知識与えてしまった」

1 時間目 ゲーテラ（前書き）

基本的に、思いつきで書くため、前書きでは・・・思いつきで

今回はゲーテラするつもりです

ネギま！の最初は暇ですね

1時間目 ゲータラ

ん〜ここはどこだ？

起きた場所は、電車の中・・・目の前は女ばっか・・・

何このハーレム状態

しばらくすると、突風がいきなり起きた

ああーいろんな色があること

・・・おっと、こつち睨まれた、目は逸らすぜ

確かネギのクシャミか？

変態個性だな

『次はー麻帆良学園中央駅』

ああー着いたか

プシュー・・・

ドアが開く

女子がドンドンと出てく

ああー俺も降りないとな

先生は1年前からのだとうれしいな新任はやダよ目立つからな

ん？後ろ姿で分るね、あれが、ネギか

でかい鞆を背負ってる、小さい、外国人

分りやすいね

スピーカーか何かで急ぎましようとか言ってる

楽しい学校だな、かなりの好み

さて、俺も走るかな、どれくらい早くなったことやら

ネギの後ろをくつつく感じで走る

ネギめ速いな、でもかなり余裕だ、30%ぐらいでのスピードで追いついてる

お！明日香と・・・学園長の孫娘だな、悪い、名前を忘れた・・・

おっと、頭を握られるネギ・・・笑える

おうおう、説明してる

確か、麻帆良学園都市の中でも一番奥の女子高エリアだから、初等部にでも行け的な感じだったけ？

おっと、上から誰か話しかけてきた

お、高畑だ、かなり強いんだよねー

いろいろと忘れてるから、どんな魔法かだなんて知らないよ俺

ん？自己紹介か

ネギ・スプリングフィールド

うん…長い 葱だな

はいはい、驚く驚く、あー暇だねー覗きばかりやるつもりですけど何か？

あ、（ < > ） 、 … … … イクシッ

うっへー下着だけ… … … しかもクマパン… …

子供だねー

あー確か、中学生か… …

あ、学校内に入ってく

おっと、俺も先生だし、学園内に入るか

といっても、俺も新任らしい

高畑に見つかり、職員室で自己紹介

見たことある顔が、ちらほら

当たり障りもない挨拶をし

普通に自分の席に座る

うん、普通の職員室だなー

俺はクラス持ちじゃない

ただの科目の先生

今頃、ネギは、クラスで自己紹介で騒がれてるな

その前には明日香に注目されるね、ミスって

俺が科目担当するのはネギのクラスだけっていう、神の力により

なんでもありだなー神は

さて、俺の授業か

教室内に入ると、結構騒いでる

チャイムになるとみんな席に座る

ふむ、イイネー

見たことある人ばかりだ

「えー俺が3学期間 数学を担当する 桜 聖夜 だ」

「まあー皆の自己紹介とかは無いので、あしからず」

だって、大抵知ってるもの、あ、孫娘の名前は木乃香なんだ、へえー

んで、授業内容は、適当にやった

んで、俺は職員室で寝た

退屈なもの

・・・ん〜暇だ

俺は起きて、ネギを探した、主人公だし、そろそろ あれが起きるはず

あーやつぱり

のどか だ

後半は重要になる人物

あー魔法使いやがった、のどかが落ちそうになったから、まっ、いい奴だな

明日香にみられて、問いただされるね

さて、俺は

「おい、大丈夫か？」

「え？あ・・・はい」

「ふむ、怪我は、ないな」

「・・・」

無口だねー、まっ、最初だし

俺は、落ちてる本を拾い、のどかに渡す

「ん、半分持ってやる」

「え？・・・でも」

「気にするな、あんな事があったのに反省しないつもりか？」

黙って頷く

「図書室までだよな・・・俺、場所分かんない」

こっちをジーンとみられた

「あー後ろついてくから」

のどかは、黙って前を歩いてく

そして、図書館につき、何やら用事があるそうので、頭を下げて、さつさと出てく

「んーでかいな、図書館」

あー俺も、パーティー行くかな

俺も走って教室に行く

教室に入り

「ネギ先生？」

「あ、えつと」

「私は新任で、数学の先生をしてる 桜 聖夜 と言います
いやー、新任で子供先生がいると聞いて、仲良くなれたらなーって
思いました」

「あー！はい！こちらこそ、僕は ネギ・スプリングフィールド
です」

と挨拶していると

「やあネギ君・・・と聖夜君、初日の授業、共にお疲れ様だったね」

「あ タカミチとしずな先生まで」

「いえ、初日なんで大丈夫でした」

「へぶっっ」

？

振り向くと明日香がネギの襟首を持ち話しかけてる

あー読心術か

ネギが高畑先生に近づき

「アスナさんのことどう思ってる？」

おいおい、直球だな、さすが子供

明日香も泣いてる

2 往復すると明日香が出て行った

あーネギのカッコイイシーンか

「いやー明日香さんはバイトしながら通ってるんですか」

高畑先生と適当に話す

「ああ、そつだよ、でも明るくて、いい子だよ」

んー気になったから、見に行くかな

廊下を出て歩いてると、・・・あのシーンだ

子供先生がコケラレテルって思ってたしまつシーン

笑える

あ、俺が泊る場所って・・・

1 時間目 グータラ（後書き）

はい、適当に書いてます

すみません、すみません、すみません

ほぼ丸パクリ

だって…どうしようと、介入できんよ 最初だし

介入したらネギの人生終わる

2時間目 ヒーマヒマー（前書き）

はい、今回もストーリーカーします

退屈ですもの、少し介入するかも

2時間目 ヒーマヒマー

俺は起きると木々の中

野宿ですけど何か？

だって、カネナイシ、学長にでも話そうかなー、面倒
んで、授業

ガラガ・・・

パシッ

「上にあつた黒板消しを止める」

チッ

舌打ちが聞こえたぞ、おい

「起立ー」

のどかが、日直か

「さて、2時間目だ、26ページを開け」

ほとんどの人は開く、まあーさぼり組は知らん

「えー、んで、こつなって、あーなる」

「さて、問い2の問題だが・・・誰かにやってもらったか」

「はい」

「はい」

皆、目を逸らすなよ、当てたくなるだろ？

「んじやーのどか、解け」

「あ、はい」

「ん、正解だ」

キンコーンカーコン

「ん、終わりが、終了だ」

俺は、さっさと教室を出る

「あ、あの」

廊下で、のどかに声をかけられる

「なんだ、のどか、授業で解らん事でもあったか？」

「・・・あの桜先生」

「ん？お前、昨日と髪型が違うな」

と言っても知ってるんだけどね、変なところは覚えてるんだ

「え、変ですか？」

「いや、むしろ似合ってる、可愛いな・・・おっとダメだな先生がそんなこと言うなんて」

といつても本音をよく出してしまうことがあるんだよ、俺

困ったもんだ

と、そんなこと思ってたらのどかがいなくなってた

「」「ネギ先生ー！！」「」

あ、そうかホレ薬だっけ、怖い怖い

俺は、図書室に向かう

「・・・あー押し掛かっている」

「へっ、桜先生！見てないで助けてください」

「やれやれ、ネギ先生、乙女の純情な気持ちを・・・って、そんな

ことをいつてる状況じゃないね」

俺は、のどか の襟首を持ち引き剥がした

そしてそのまま扉の横に回避

「何をやっとするかー!!」

これが来るからね

扉を吹っ飛ばす脚力怖い怖い

「ア アスナさん!?!」

「あ、桜先生!」

「怖いな、明日香さん」

「え、あ、すみません」

「ふう、まあいい のどかは寝かせてある、後始末はなんとかしな」

俺はここから立ち去る、面倒はヤダよ

あ、俺の住むところ・・・どろじよう

2時間目 ヒーマヒマー（後書き）

はい、今回は 少し介入しました

こんな感じで書いていこうと思います

だんだんネギ達に介入してくよ

序盤を壊すと後が詰まる

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん(前書き)

3時間目は女子寮侵入しようとしたけどヤメタ

てなわけで4時間目 聖夜も少し介入するよ

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん

朝早く起きてしまった・・・

すこし見回るか

ん？

明日香か・・・浮いてるのはネギか

もう堂々と魔法見してるねー

・・・もうひと眠り

職員室なう

教室なう

「居残り授業ですか？」

「あ、桜先生」

「俺も見して貰おうかな、俺一様何でもできるから」

「桜先生って英語もできるですか！」

「できるぜー
んで、小テストか」

「はい、じゃあまずこれから10点満点の小テストをしますので
6点以上とれるまで帰っちゃだめです」

「ふむふむ（簡単すぎる）」

「できましたです」

「ん、夕映か、ドレドレ」

「ふむ、9点だ 合格だ・・・ていうか頭いいじゃないか」

「勉強キライなんです」

「あー解る、俺も嫌いだったからな、ちゃんと勉強しろよ」

「ヤダです」

いや、嘘でもいいからOKしろよ

「できたアルよー」

「ん？次はクーか」

「そうアル」

「・・・4点・・・やりなおした」

しばらく

「先生できたアルー」

「ん、クー8点だ、合格、よくやった」

「ワタシ日本語勉強だけで精一杯なのアルよ」

「と言うと、普通だったら合格できるな、なら大丈夫だ」

「さようならアルよー」

軽く手を振る

後は明日香か、心弱ってるねー

「おーい調子はどうだいネギ君」

「おっと聖夜君もいたのか」

「お手伝いだ」

「感心するねー おっ、やっぱり例によってアスナ君か

あんまりネギ君と聖夜君を困らせちゃダメだぞーアスナ君」

んで、逃げ出した

俺は、去るかな、後はネギが何とかするはずだ

3時間目 はカット 4時間目 補習は嫌だ面倒だもん(後書き)

はい、だんだんと慣れたけど、こんな感じでいいのかな？って疑問に思う

7 / 8 / 9 / 10 時間目 さあー冒険の始まりだ！(前書き)

さあーどんどん介入してくぞ！

てなわけど大作戦にも参加しちゃいます

7 / 8 / 9 / 10 時間目 さあー冒険の始まりだ！

昨日、学園長に呼び出された

話の内容は、期末テストの問題作成・・・いや新任の俺に任せるなよ
そうかー期末テストか・・・探検に出るねーあいつら・・・俺もつ
いていくかな

問題作成は、もう終わらせといた

あー林の中で魔法封印してるネギだ・・・

さて、図書館か

集まってるね

「おい、ネギ先生達何してるんだ？」

「『『『『『『『『』』』』』』』」桜先生！

「大方、探検か？」

「あ、いえ、はい」

「ソウアル」

一部があっさり答える

「イイナー俺も付き合っぜ」

「「「「「ええー!!」「」「」」」」」

「楽しそうなこと好きだからな」

「（桜先生の事少しわからないや）」

ネギが何か考えてる

夕映がイロイロと説明してる

扉をあけると

「わーっ!?本がいっぱいホントにスゴイぞ!」

本が炭酸ある部屋に出た、そこら辺に本棚だ

「ここが図書館島地下3階・・・私たち中学生が入っていいのはここまでです」

ネギがハシャイデル

子供だな

ビュンッ

弓が飛んでくる

ガシッ

「うひゃ!?!」

楓が弓をキャッチ

さすが忍びだな

お目当てのものが『魔法の本』だ

何かいろいろ話してるけど無視無視

「では出発です!」

「「「「おーっ」「」「」

しばらく歩いてると

まき絵が落ちそうになったけどリボンでセーフ

すごい身体能力だ

次にネギに向かって本棚が落ちてくる

クーが飛び蹴り

楓が本キャッチ

本当に、あいつらの運動神経スゴいな

パートナーになってほしいねー

ネギがドジっ子中

明日香がホロー

もう付き合っちまえよ

目の前でイチヤイチャしやがって

しばらくすると弁当を食べることになった

にしても、この図書館本当にでかいな

さすが図書館島って事だけはある

んで、しばらく歩き、狭い通路を通ると

広間に出た

あ、メルキセデクの書さんチイス

ネギが騒いでる、ちょっと煩いよ

バカ組が本を取ろうと走り、ツイスターゲームへ

学長の趣味だな、本当にパンチラ多いねー

最終問題でお猿・・・『ら』と『る』を間違えるなよ・・・

床破壊された・・・って

「ちよー!」

「「「キャアアア」」」

まあー下は水あるから大丈夫だけどね

ザッパーーーン

「あれ・・・？ここ・・・どこ？」

「・・・そ そうだ 僕たち英単語のトラップを間違えて、ゴール
ムに落とされちゃったんだ」

「っつて」

「「「ここがどこなの〜！！」」」

「どう見ても地下だな、ネギ先生」

「桜先生、僕達助かるのでしょうか」

「ん〜、助かるでしょ、ダンジョンには隠し扉とかあるのは定番だ
し」

「ここダンジョンなんですか」

「いや、違うでしょ」

「痛っ・・・」

「アスナさん!?!」

どうやら明日香は怪我をしたらしい

ネギは杖を持ち手をかざし

「ラス・テルマ・スキル・・・」

ネギよ・・・お前魔法封印してるだろ

「（ハッ・・・）」

気がついたようで・・・

ネギは担任として、みんなを励ましてる

って、こんな状況で授業かよ！

て言うか、テキストもトイレもキッチンも食料も・・・

都合がよろしくて・・・

んで、暫くして

「誰か助けてーッ」

まき絵え・・・不幸な少女よ

ゴーレムに掴まれた まき絵

あー皆タオル1枚。俺は観戦でもしますか

ネギが魔法を唱えた・・・でも封印があるから打てない・・・ドジっ子ネギ・・・

というか明日香以外の知らない生徒にバレルゾ・・・まあバカ組だから解るはずもなく

学長も手助けの声

ネギがドンドン暴露

クーと楓のコンビネーションにより まき絵 救出

その まき絵 のリボン技術で魔法の本ゲット

逃げる生徒たち・・・俺放置・・・orz

だって、まだ馴染んでないんだもん

はあ、そうだ、俺・・・始動キーなんだろう

魔法を唱える為には始動キーという魔法を放つための暗証番号的なものがあるらしい

教えてもらってない・・・適当に唱えてみるか

誰もいないことだし

適当にあさっての方向に向いて、杖？はないよ、人差し指を立てて

「光の精霊1柱・・・『魔法の射手・連弾・光の1矢』」

ウンデトリーギンタ・スピリトウス・ルーキス・・・サギタ・マギ
カ・セリエス・ルーキス

>魔法の射手くの光版。白い弾を相手に撃つ。

光の球ができ、それが、指をさした方向に飛んでいく

バーンッ

本棚にあたって、本棚が倒れた

おお、始動キーいらなの・・・スゲー

間違えて撃ってしまいそう怖いじゃないか

おっと、そろそろ脱出してるかな

・・・うええええ、螺旋階段を歩く

あ、ゴーレムだ

「学園長・・・何やってるんですか？」

「おお、その声は聖夜君か、よくワシだと解ったの」

「声で解りますよ、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃ、ワシは丈夫だからのう」

「さて、俺は、さつさと戻りますか」

「そうじゃ、聖夜君」

「なんですか？」

「君・・・魔法使いじゃろ」

「・・・なぜ？」

「バレることしてないのに」

「君の態度で解つたのだ、ゴーレムと判つても驚かないし、余裕そうな顔だからのう」

「・・・そうですか・・・俺は魔法使いですよ、一様・・・」

「・・・あー追い出されるかなー、追い出されたら暴れてやる・・・」

「認めるんじゃないな・・・ネギ君の面倒を見てくれると嬉しいじゃが、危なっかしい子でのう」

「あれ？追い出さないんですか？知らない魔法使いなんて・・・危ないでしょ」

「フオフオ、君の眼は腐ってないからのう、なぜか信用もできるでのう」

「嬉しいですね、俺もネギ君は好きですから、もちろん友達として」

「では頼もう、しっかり面倒を見てくれ」

「もちろん陰で……ですネ?」

「それでよからう」

よし、学園長にバレてしまったが、追い出されなかった、そしてネギの面倒が見れる……

自分に都合がいい方向に動くだなんて……これが神の力か……

7 / 8 / 9 / 10 時間目 さあー冒険の始まりだ！（後書き）

・・・はい、ネギ君の面倒が見れるようになりました

学園長に魔法使いとばれる・・・という事を先にしとくことで

のちの展開が楽になります

なんつう都合がいい方向に持つてく

怖い怖い

26時間目 26時間目って長い授業だな

「ふぁー、いやぁーよく寝たなー・・・はじめてこんなに気持ち良く寝たぜー」

「あぁーそうかい、早く出てけ」

起きると、エヴァが椅子に座ってコーヒーを飲んでた

「聖夜先生、おはようございます、コーヒー飲みますか？」

「あぁー頼む」

「エヴァ、朝飯は？」

「なんで貴様なんか朝飯なんて作らないといけないのだ」

「ちえ」

「聖夜先生」

「茶々丸、学校じゃないから聖夜さんで構わん」

「ですが「聖夜さんでいい」」

「判りました、聖夜さんパンはありますけど食べますか？」

「あぁー食べる」

「んで貴様はいつまで、いるつもりだ？」

「俺の気分次第」

「……というはずっといるつもりかあああああ！！」

「おお怖い怖い、気分って言っただろ、大体俺は、ネギの監視というかモグモグお守があるから、大抵は外だモグモグ、パンうめえー」

「お守というと何かがあるのか」

「さあね、俺は学園長に言われただけ」

「そうか、私は出掛けるぞ」

「いってらー、あ、合鍵なら学園長からもらったから安心しろよー」

「返せ！！」

「断る！！」

暫くすると、エヴァが帰ってきた、ずいぶん嬉しそうだな、ああー
サウザンドマスターが生きてるって聞いたからか

「エヴァ、ずいぶん嬉しそうだな、いい事でもあったか？」

「何でもない」

「そうか、フフ」

「何を笑ってるんだ貴様は」

「いや、エヴァの嬉しい顔を見たら、なんかこっちまで嬉しくなっ
た」

「むっ」

「うん、愉快だ、俺も愉快だぜ」

「ふんっ！」

「マスター照れてる」

「茶々丸！お前はいつも要らん事を言う」

「マスター照れ隠し」

「エヴァ、かわいいな」

「なっ、貴様！出てけー」ブンッ

「ちょ、物を投げるな」

ブンッ、ブンッ

「あー判った判った、今日は出てくからー」

ガチャン

「はぁー今日は野宿か」

ん〜そういえば、修学旅行編がそろそろか・・・

俺はエヴァと一緒にしばらく楽しむかな・・・

あ、石にされるとこは助けてあげたいけど・・・いじりますのは良
くないよな・・・眠い

寝よう

26時間目 26時間目って長い授業だな(後書き)

といっても、その日までカットしますけどね！

45話 さあー少し楽しみようか

今日は少し暴れるかな

んー修学旅行の日を送ってるネギ・・・だけど今日は右にされる所
だっけな

俺は学園長とエヴァが囲碁してる所にいる

ん？連絡来たな

「今すぐそこへ急行できる人材は・・・ほ！」

「ん？何だジジイマヌケヅラして」

「こつちもか・・・」

「君たちに西の本山に行ってほしいのだ」

「ふーん（知ってたけど）」

「いけるのか!?!」

「お、エヴァと一緒にいけるのか!」

「そうじゃのー」

「学園から出れると言っただろおが!? やっぱり駄目とは」

「ううゝむ修学旅行も学業の一環じゃし短時間なら呪いの精霊をだまくらかせると思ったんじゃがのゝ」

「ナギの奴め力任せに術をかけるけおつてからに・・・」

「・・・正直無理かも テヘッ」

「てへ、じゃない!! 何とかしろじじい!!! 殴るぞ!?!」

「マスターそんなに熱心になって」

「よほど聖夜さんと出掛けたいんですね・・・」

「誰・が・聖夜と行きたいだなんて」

「私はただ出掛けたいだけで・・・」

「ええい まいてやる まいてやる このポケロボッ」カリカリカリ

「あああ いけません そんなにまいては・・・」

「あー早く一緒に行きたいなー」

ん? エヴァが何かやってるな

あーネギ達に話してるのか・・・

さーって楽しもうか少しだけだけど

「ウチのぼーやが世話になったようだな 若造」

変な人形さんの腕を掴んでパンチ

吹っ飛ぶ・・・あーさすがだぜエヴァ

「エヴァ、俺の力を見せてやろう」

「桜先生!？」

「フッフ、見してみる、ダメだったら追い出してやる」

「それは困る、んじゃ・・・お前の魔法を出してやろう!」

「なにっ!」

「パクツてやろう!」

「来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を・・・『凍る大地』」

「契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえの間。永遠の氷河。全ての命あるものに等しき死を。其は、安らぎ也。』終わる

世界』」

「ふん、弱いな、ただのデカイだけのモンスターだな。ハーハツハツハ」

「つつつ 次から次へとなんや何なんやー」

変なメガネ女が何言ってる

「運が悪かったな、この俺の友達に手を出すとかな」

「俺の名は桜 聖夜 あらゆる魔法を使える男だ！」

あ、やべ少し 言ってしまった

「さあー終わらせようじゃないか」

「全ての命ある者に等しき死を 其は安らぎ也」

「”おわるせかい” 砕けな」パチンツ

「粉碎 玉砕 大喝采 アーツハツハツハ」

「す、すごいな聖夜、本当に私の魔法を使えるだなんてな、何者なんだ……」

「俺は桜 聖夜 それだけだ……というか覚えてない」

「や やった！すごい 桜先生」

「どうだ、俺の力は」

「すごいです 桜先生 そんなに強いだなんて」

「ま、まあ私のほうがすごいけどな」

「そうだねーエヴァ」ナデナデ

「やめろ、聖夜」

バシ

「エヴァさんもありがとつごぞいます
でも、登校地獄の呪いは？」

「あ そーよ 学園の外に出られないんじゃないの？」

「それですが・・・」

茶々丸が説明

「今回の報酬として明日 私達が京都観光終えるまで じじいには
ハンコ地獄を続けて貰う
こんな機会もうないからな！」

「今回の件でイイものが見れたしな、少しかつこよかったぞ聖夜」

「・・・デレた・・・」

「す、少しだけだ！」

「マスターがデレましたね」

「茶・々・丸！！」

カリカリカリ

「ああーいけませんマスターそんなに巻いては」

「仲がいいですね 三人とも」

おっとそろそろ不意打ちが来るな

「エヴァンジェリンさん！！」

「障壁突破”石の槍”」

「バカ どけっ」ドンッ

「あっ」

ドギッ

戦う時フルボッコ確定だな

「がつ……ぐ……貴様っ……」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「『人形使い』か……」

アリス？んな訳がないな

「エヴァンジェリンさん！！」

「エヴァちゃん」

「フ・・・」

ボウン

ザアアア

ザッ

「そのとおり」

「『不死の魔法使い』さ」

ボッ

ズシャアアッ

「・・・なるほど 相手が吸血鬼の神祖では部が悪い」

「今日の所は僕も退く事にするよ」

んー俺無視かー悲しいな

「逃げたか」

「マスター御無事で」

「エ エヴァちゃん いい 今のって」

「ほら、エヴァ ハンカチで拭けよ」

「うむ・・・ありがとう 今のガキも人間ではないな 動きに人工的なものを感じた 人形かあるいは・・・」

「どこの手の者かはわからんがな・・・まあ安心しろ 修学旅行中は 聖夜と私がついてる」

「じゃなくて 今 岩がグサーて血がドバーって」

言い方・・・

「ん？ああ 吸血鬼 特に神祖は、ただの剣や銃で死なん映画とかであるだろ」

「再生は疲れるしメンドいからキライなんだが」

「よかった・・・エヴァンジェリンさん」

「う・・・」

「あー！」

「ん？」

ドサマッ

「どいどい どうしたばーや!？」

「ネギ先生!？」

「ネギちよちよちよとっ」

「兄貴っ ひでえっ 右半身が石化を・・・」

「（治せるけど面倒・・・っていうか助けってくるだろ、あいつらが）」

「ネギくーん」

「ネギ先生」

大抵の人が集合してきた

「ど、どうにかならないのエヴァちゃん、桜先生!!」

「んー回復はちょっと（面倒）」

「わっ・・・わわ私は治癒魔法は苦手なんだよ 不死身だから」オ
ロオロ

やっぱりオロオロしてる姿可愛いな・・・抱きしめたくなる

さーって仮契約か・・・頑張れ 木乃香

「ここのかさん?」

「よかった 無事だったんですね・・・」

「なァーエヴァ あいつの方は・・・」ヒソヒソ

「大丈夫だ、手はまわしてある」ヒソヒソ

あの人形もカワイイと思ってしまっ自分怖いな。

朝

エヴァと刹那の会話を横で聞いて刹那が去ろうとする

ネギが止める

その様子を俺とエヴァは茶々丸のお茶を飲みながらマッタリタイム

「若いっていいよな」

「いや、お前は見た目gg」

グーパンを食らった

んー3 - Aの女たちが慌ただしく出てくる

イイハナシダナー終了

暫くタツテ

俺とエヴァ達はネギ達を無理やり連れ出し観光

長との集合場所に・・・

「マスター満足行きましたか」

「うむ いった」

「（んーいい笑顔だ）」

ちよつとシリアルの話聞き

ネギのお父さんの昔使ってた部屋に案内された

そしてネギのお父さんの話を聞いた、まあー知ってるけど

記念写真と言われたが俺は長と同じく上に

今思ったが学園長・・・死んじゃったかな？

45話 さあー少し楽しもうか（後書き）

はい、初戦では、エヴァの物まねをしました

エヴァが聖夜の呼び方・・・

ええー名前を呼び捨てです

聖夜ってロリコン

いえ、ロリコンというよりは小さい人が好きなだけですから
けっしてロリコンでは・・・

なぜエヴァが刺される時、助けなかった

信頼してるからでしょう、しなないって・・・

でも覚えてなかったら助けてますね

でも、あの人は、次に聖夜にあつたらフルボッコされるかもしれ
ません

54時間目 弟子ってヒロいって思ってしまった

「くぁー日曜日かー」

「おはようございます、聖夜さん」

「んーおはー茶々丸、エヴァは？」

「マスターなら寝てますよ」

ほお、これはイタズラ・・・チャンス？

エヴァのベットの横に座り、顔をのぞいてみる

「気持ち良さそうに寝てるな」

ツン

「ん〜」

ツンツン

「むう〜ハムツ」チュー

うお、指先を噛まれチューチューしだした

「」ゴクゴク

「」

「つま

「聖夜さん

「うお、なんだ

「そろそろマスターを起こしますので

「ああーわかった

「下に降りてる

「はい

暫くして

「んあーおはよう 聖夜、クシユン」

「おはよう エヴァ・・・花粉症か？」

「ああ、そうなんだ、クシユン」

「大変だな

コンコン

「客か・・・」

茶々丸が外に出る

入ってきたのは ネギと明日香だ

「桜 聖夜さん、僕を弟子にしてください」

「は？俺の弟子にだと？」

「無理、学ぶならエヴァにしとけ」

「あなたの京都の戦いで魔法の戦い方を学ぶなら聖夜さんしかいないとー！」

「残念ながら俺は、自分の記憶が一部失ってるんだ（嘘だけど）、戦い方など体が勝手に動くだけだ（嘘だけど）、何よりもエヴァの方が魔法は詳しい」

「聖夜・・・お前、私を高く評価してるんだな」

「そりゃー魔法技術とか、エヴァの方がウマイと思ってるよ」（面倒事の回収とか）

「判りました：聖夜さんがそこまで進めるなら・・・エヴァンジェリンさんお願いします」

「聖夜が勧めてくれたんだ、判った、だが代償が必要だぞ・・・」

「まずは足をなめろ」

「話が下部として永遠の忠誠を誓え話はそれからだ」

「アホかーっ」

明日香のハリセンがエヴァを叩いた

あー痛そうだね

必至だねー

確か、ホレチョコ食ったんだっけな・・・

さて、今度の土曜日、もう一度来てもらいテストするんだっけな

ネギ達が帰った

「聖夜、なぜ私を進めた」

「ん？なぜって言ったとおりだぞ」

「貴様が教えた方がよかつたんじゃないか？」

「何を言う、確かに京都での戦いでパクれる技術と魔法力を見せたが・・・あくまでもパクリだ、

それに・・・お前の昔の技・・・」

「なんだ？聞こえんぞ？」

「まっ、お前はネギを受け入れた、俺は教えられるほど説明がうまくない、先生には向いてない以上だ」

「ハブらかされた気分だ」

「ほら、撫でてやるから」ナデナデ

「むう」

「マスター照れてる」

「茶々丸ー!!」

ずいぶんと慣れたなーこの環境

最初は出てけ出てけ と煩かったのにな

暫く

ある日の早朝

「んー早朝散歩っていいものだねー」

「ああ、悪くない」

ん？あれは、ネギとまき絵・・・って、ああー焼きもちやくところか

「ふん・・・カンフーか」

「ずいぶん熱心じゃないか、ぼーや」

「あれー？エヴァさま茶々丸さんに桜先生おはよー」

「あ おはようございます！お仕事ですか？」

「そっちの修行をすることにしたのか？」

「じゃあ 私への弟子入りの件は白紙ということでもいいんだな」
「むすつ……」

ああー不機嫌になった……焼き餅食いたいくなった

「ええつ！？」

「（あれ……）」「さま……？」

言い訳するネギ

理由を聞く、まき絵

「じゃあな ま 子供にはカンフーごっこは、お似合いだよ」

「あつ……待ってくださーいっ」

「聖夜さんが、せっかくマスターを勧めてくれたのにカンフーを必死に学んでるのでヤダったんですか？マスター？」

「なつ……？ち ちがうわっ！」

「ん？どうしたんだエヴァ？」

「な なんでもないわっ！」

変なエヴァだな

「ちょっとーエヴァちゃん何でネギ君にイジワルするのー？弟子にしてあげればいーのに 何のでしか知らないけど」

「聖夜さん気持ちを踏みいじったのが嫌なそうです」

「へ？」

「ソナニ気ニ入ッテンノカセイヤノコト」

「ちがうっつーのコラ」

茶々丸を揺らそうとするエヴァ

「フン 子供の遊びに付き合う趣味は無いんだよ」

「お前みたいな子供っぽい奴と話すのもな佐々木まき絵」

あー怒ったね、まき絵さん

んでテスト内容が決まったそうです

カンフーで茶々丸に一撃入れること・・・茶々丸かわいそうだなー

まあ強いからねー茶々丸

んで、ふっ飛ばされちゃうネギ・・・あ、ごめん可愛そうなのはネギ君だ

んで土曜日だ

「んーそろそろかー」

「オイ 御主人コレジャ試合が見エネーゾ」

「モットイイ位置二座ラセロヤ」

「ん、チャチャゼロ、俺と一緒に見るか？」

「ソレデ構ワネー」

「ん」

「ケケケ」

チャチャゼロを俺の頭の上に載せた

「しかし良いのですか聖夜さんとマスター」

「ネギ先生が私に一撃を与える確率は概算約3%以下・・・」

「ネギ先生が合格できなければ聖夜さんとマスターとしても不本意なのでは・・・」

「大丈夫だ、一撃決めるよネギは」

「勘違いするなよ茶々丸、私は聖夜が勧めたから弟子をとってやる
うと」

「それに一撃当てれば合格などとは破格の条件だ、これでダメなら、
ぼーやが悪い」

「いいな茶々丸手を抜いたりするなよ」

「ハ・・・了解しました」

「まあー大丈夫だと思っけどね」

「そろそろ時間か・・・」

「エヴァンジェリンさん」

来たね〜

さて、俺はイスに座って観戦観戦

「チャチャゼロは俺の膝の上な」

「ワカッタぜ聖夜」

「ネギ・スプリングフィールド弟子入りテストを受けに来ました」

「よく来たなぼーや」

「では早速始めようか」

にしても、ギャラリー沢山だなー人気者めが

「では始めるがいい!!」

「始まったねー」

んー最初は良い感じだな

「ふん・・・我流の自分への魔力供給か」

「んでも、二日程度じゃどうにもなんないね技術差で」

お、ふら付いた

誘いだ

でも、相手を誰だと思ってんだ・・・

あーカウンター食らった

「・・・チツ(この程度か)」

「ふん・・・まあ そんな所だろう」

「ゴキゲン ナナメダナ御主人」

「残念だったな ぼーや だが、それが貴様の器だ」

「顔を洗って出直してこい」

「おいおい、エヴァ、余りネギを舐めない方がいいぞ」

「聖夜、どういふことだ」

「見てみな」

「まだです・・・まだ僕くたばってませんよ エヴァンジェリンさん」

「お前の出した条件は、くたばるまで だ・・・それが仇になったなエヴァ」

「な・・・何っ！？まさか貴様・・・」

「たぶん、当てるまであきらめない・・・まっ、限界まで見せて貰おうかな」

「んー根性あるねーネギ君」

「ぼーあ もう いいだろ いくら防御に魔力を集中しても限度がある」

「エヴァ、見てるしかないよ、あきらめないからねネギ君は……」

「うーしかしだな」

明日香が止めようとしたけど
まき絵が必死に食い止めた

「若いねー」

「これが、若さか……」

あ、茶々丸……

「オイ茶々丸!!」

「え?」

ペチン

「……あ」

「な」

「フフ、当たったな」

「う……あ……あれ？」

「ぼ……僕？テストは？」

「合格だぜ、ネギ君、おめでとう」

「……ふん負けたよ、ぼーや」

「ご機嫌だね、エヴァ」

「フン、条件が違ってたら落ちてたさ」

「デレヲカクシテルナ御主人」

「フフ、頑張つて教えてやれよエヴァ」

54時間目 弟子ってヒロいって思ってしまった(後書き)

やっと弟子入りまでキタネー

オリジナルって思いつかないから困る

60時間目 カードをドロ―

エヴァが初弟子と仮契約の4人と練習らしいです

「よし では始める」

「契約執行180秒間」

3分か・・・

「よし次だ 対物・魔法障壁 全方位 全力展開！」

「ハイ！」

「1次 対魔・魔法障壁 全力展開！」

「ハイ！」

んで、3分持ちこたえての射手199本

それを放ったらネギが倒れてしまった

少し休憩した後、何やらネギがエヴァと話をしたら、ネギが殴られた

「なあーエヴァ 何話してたんだ？」

「ん？ああドラゴンをいつ倒せるかって言われた」

「ドラゴン・・・ああ（あそこのか）」

「聖夜は知ってるのか」

「いや しらない」

明日香がネギを吹っ飛ばした後

「ぼーやと近衛木乃香 お前たちには話がある」

「帰りはウチに寄っていけ」

「え・・・」

エヴァの家ナウ

「なあー茶々丸」

「なんでしょうか、聖夜さん」

「エヴァって目が悪かったけ？」

「いえ、あれは伊達メガネです」

「うーん、似合ってるね」

「聖夜さんはメガネある方が好きですか？」

「いや、裸眼の方が好きだな」

「そう、ですか」

なにやら茶々丸がほほ笑んだ気がしたけど気のせいかな

茶々丸って視力どのくらいなんだろうな・・・

「人の話を聞け貴様らーッ」

ネギが、さっきの件でイジケテル

エヴァがネギ達に魔法の方向性を言ってるのか

まあー当然ネギは魔法剣士だろうな

親父の事があるだろうし

んで、また落ち込んだ

ハカセが茶々丸の音声データをプリントアウト
んー何々・・・仲間はずれとかイロイロ原因はあるな

でも

「「「「「原因はパイ　ン（だ、ダゼ、かもな、かもです、かと
おもわれます）」」」」」

「そこから離れてくださいーっ!!」

「とりあえず謝れ、話はそれからだ」

はい、ネギが出て行った

失敗　高畑クウキヨメ

60時間目 カードをドロ―（後書き）

オリジナル性が欲しいです

エヴァのメガネって伊達メガネなの？

さあー知りません、すみません

イロイロカットしすぎ

すみません、大抵エヴァといますから、ネギ君とは余りいません

監視は良いの？

聖夜は原作を知ってますから、何が起きるか知っています
危ない時は助けます

原作はかいは？

殺戮とかは苦手なので、まあーどうなるかは・・・

63 時間目 観戦って案外楽しいな（前書き）

もう63時間目ですか、早いものですねー

63時間目 観戦って案外楽しいな

別荘ナウ

エヴァがネギと交戦中

「んー12秒か」

「どうした、たったの12秒だぞ」

「3対1とはいえせめて1分は持たせろ」

「この程度では、あの白髪の少年などには相手にもならんぞ」

「そうだねーちよちよいのちよいでヤラレチャウネ今のネギ君だと」

「うう〜」

「さらにいくぞ」ボンッ

「茶々丸ーお茶取ってくれろ〜」

「畏まりました、聖夜さん」

「どもども」ゴクゴク

「来たれ、虚空の雷。薙ぎ払え。」

「『雷の斧』」

「ひゃああ〜!〜!」

「・・・今のが決めとしてそれなりに、有効な 雷系の上位古代語
魔法だ」

「へえーこれがオコジヨかー」

「ん？聖夜の旦那か」

「いやー始めてみたなードジヨウみたいなんだな」

「ド ドジヨウー!」

「面白いなーお前、まあいいや、このごろはずっとネギ君の修行見
てるけど、まあいい感じになったな・・・今のところは」

「へへへ、聖夜の旦那、焼きもちやいてるんでしょう」

「な・・・フン」ゲシ

オコジヨを蹴り飛ばした

「（まあーこの所、ネギと練習ばっかで、俺は退屈だからな・・・弟子にしとけばよかった・・・）」

次の日

ん、あの集団・・・ああー尾行か・・・

やかましくなるなー

あ、家に入ってた

よし、明日香も別荘に入ったな

俺も入るか

今頃は皆、あってるだろうな

んで、俺も皆に会った

「あの、エヴァンジェリンさん、・・・・（思いつかない）というわけですが」

「・・・何？魔法を、私に教えると」

「何で私が、そんなメンドくさいことを、・・・そうだ、聖夜 教えてやれ」

ちよ、こつちに飛んできた、原作じゃ、ネギだろ・・・

まあいいか

「ん、別に簡単な事ぐらいなら教えてやる、ネギ、お前あれ持つてるだろ、皆に貸してやれ」

「え？聖夜さん、何で知ってるんですか？」

「キニスルナ、初心者用の杖を貸してやれ」

「はあ」

「これを持ってな、」 プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）だ」

「見てろよ、」 プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）」 「ヒュッ

ポッ

「まあ、こんなんのやるんだったら、ライターの方がいいけどな」

夕映に魔力の事を聞かれた・・・まあー知識あったから、教えた

「つまり魔力とは 空気、水その他全て万物に宿るエネルギーということでしょうか」メモメモ

「ああ、大体あつてる。そのエネルギーを息を吸うように体内に取り込み・・・杖の一点に集中するイメージで・・・」

「・・・行くです」

「 プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）」

シーン

「まあ、普通の人は何カ月も練習しないと、無理だから・・・」

んーみんな楽しそうだな

「プ プ プラプラクテッ」

「もう少し、肩の力を抜こうな」

のどか・・・緊張する事ないんだよ・・・

「プラクテーーーー」

木乃香・・・めちゃくちゃにあやっても

別荘内で夜ナウ

「な 何してるんだろー・・・」

「ふーむ アレは意識シンクロの魔法だな」

「おー意識シンクロきますかー」

「う ひゃいっ!? エ エヴァエヴァエヴァンジェリンっちゃん
!?せ、せ、聖夜さんまで!」

エヴァが、のどかを洗脳・・・

フッフ、俺ものぞこっつと

「ガキ八落（漢字なかった）トシ易イナ」

「単純だからな・・・」

「ネギ先生・・・ちよっとかわいそう・・・」

「ふん・・・」

「ほおー」

「早く誰力死ナネーカナ」ウキウキ

終わったか

「協力つて……そんな ダメですよ」

「聖夜さん……^{マスター} 師匠この人達に何とか言っ
てあげてください〜
〜っ!〜!」

「……ま、まあ。俺も協力してあげる……
からな」
「イイハナシ
ダナ」

「いや……まあ私も協力してやらん事もないが」

「泣イテンノカ」

「ちょっとちょっとおそーじゃなくて師匠……
聖夜さーん!〜!」

「んーやっ
と帰ったか」

「やれやれやっ
とづるさいのが行ったか」

「楽しそう
でしたが? マスター」

「……ん
……?」

来たかー

「どうかしましたか・・・？」

「いや・・・気のせいかな」

ところがどっこい気のせいじゃないんだよなー

「エヴァー俺少し出掛けてくるー」

「ん・・・別にかまわんが」

「聖夜さん、傘は」

「いや、ちょっと空を飛んでくるだけだから、傘は邪魔で」

「なら、風呂を沸かせておこつ」

「ん、助かる」

さーって、介入しますか

「おうおう、派手にやっていますね」

「誰だ、貴様ハ」

「ん？先生だよ」

「桜先生」

「てめーもこんなかに入れてやる」ブン

「お断り」ガシッ

ブン

シュッ

「おっと、三ッ・・・匹、相手はヤダナー」

「命令が終わるまで邪魔はさせないカラナー」

「フフ、相手になってもらおう」シュッ

バシッ、ベシッ

「甘い甘い」ガッ

んー魔法使ってもいいけど・・・すぐ決着付けるのはヤダナー

「どこを見てるのカナー」ブン

「おつつい」ゲッ

ゴポッ

ん？やっとか

「！？」

「しまッタ」

「止めレ」

「だーめ」ガシ

「くっ間に合わないデスウ」

瓶は俺が回収

「あれ？瓶は」

「させねエゼ」

「それは俺のセリフだぜ・・・フンッ」ブン

「くう」

二人（すらむい、あめ子）は瓶入りな

「封魔の瓶」
ラゲーナ・シグナートーリア

「いやあーんデスウー」

「また瓶の中カヨーッ」

「先生、後1人？が」

「んーわかつてる」

「何デ」

「フフン、飼おうかなと思ってな」

「飼う?」

「んー気に入った」

似てるところが

「素直に飼ワレルト?」

「お前は、瓶の中に入りたいか? 入りたくないだろ、なら俺と一緒に住め、そしたら封印はしない」

ぷりんは暫く、頭をひねり・・・頷いた

「フフン、契約だぜ、裏切ったら、溶かしてやるかな」

「コク

「んじゃ、皆、俺は先に帰らせてもらうよ、決着もついたようだし、あ、瓶はネギにでも渡してやれ」

皆は啞然としてたが、瓶は受け取ってくれた

「んじゃ、行くぞ、ぷりん」

ぷりんは俺の後ろについて来た

エヴァの家に帰ると

「何だ、聖夜そのスライムは」

「俺のペット、飼う事にした」

「却下だ」

「却下を却下で」

「聖夜さん、タオルを」

「ん、ありがとう」

ぷりんは俺の後ろに隠れてエヴァを見てる

「大体、聖夜は私の家に居候してる身だから、私の言うことを聞け」

「ええーんじゃ、ジャンケンで決めよう、俺が勝ったら、ぷりんは飼う、負けたら、追い出す」

ぷりんは追い出すって言葉にびくっとした

「いいだろう、ジャンケンだ」

はい、勝ちました

「くう、私のゲーが・・・」

「マスター元気出してください」

「フフン、俺の勝ちだぜ」

「てなわけで、ぷりん、おめでとう、俺と一緒に住めるぞ、ダメだったら・・・まあ、買ったから良しだ」

ぷりんは、ジャンプして喜んだ

結構無口なんだな・・・

63 時間目 観戦って案外楽しいな（後書き）

はい、ぷりんが仲間になりました

何故ぷりんを生かした

聖夜は原作で、ぷりんを見て・・・ゲフンゲフン
まあーエヴァに似てるからです

ジャンケンの結果で・・・もし負けたら・・・考えてなかった、追
い出すことはしないとあります

72時間目 学園祭・・・いい思い出が・・・(前書き)

ついに学園祭辺に入りました

72時間目 学園祭・・・いい思い出が・・・

「学園祭か・・・」

「なんだ聖夜、急に」

「いやあー15日前だね」

「そうだな」

「エヴァはどうするの?」

「私は・・・そうだな、ネギを出させようと思うんだ、今の実力を測りたいからな」

ああーあれか

「そうか、茶々丸は?」

「私ですか・・・マスター達の手伝いなどをするつもりです」

「ふうーん」

「聖夜はどうするつもりだ?」

「俺は、だらける」

エヴァがグテツとした

「聖夜・・・働けえー!!」

「ハツハツハ、ヤダ」

14日

超包子前

うつへー人気だなー・・・さすがってわけか

「あ、聖夜さん」

「よう、っていうか大丈夫か？」

「大丈夫です、バランス機能がありますので」

「そうか、注文いいか？」

「はい」

「肉まん2つ」

「畏まりました」

「お待たせしました」

「どもども」

夜ナウ

「んーやっぱ、おいしいなーこの飯は」

「聖夜」

「ん、おお、エヴァか、飲むか？俺、見青年だけど」

「な、お前、見青年なのに飲んでるのか」

「んー俺、飲んでないよ。エヴァが飲むか？って聞いただけ」

「いや、お前が見青年つてのも驚いてるんだが」

「子供先生がいるんだから、俺が見青年つてのもありだろ」

「そ、そうなのか・・・」

暫く

どこかで

ん？あれは、相坂かー

ネギ達・・・成仏してないぞ・・・

まあー

「よかつたな」

「よかつたな相坂さん」

「マスター達、誰に話しかけてるんですか？」

「えっ・・・」

暫く

「んー茶々丸、超包子に行くぞー」

「はい、聖夜さん」

「ん？髪縛つたのか？」

「はい」

「うん、似合ってるじゃないか」ナデナデ

「そ　そうですか」

「オシャレでもしたくなつたのか？」

「おっと、早く行かないとな」

「は　はい」

超包子前

「うみゃうみゃ
」

「おはよーございますー」

「よう、ハカセ
」

「桜先生、もう常連ですね」

「うまいからなー本当に」

「ありがとうございます」

「四葉にも癒されるからなー」

「ネギ老子 今日も来てるネ すっかりウチの常連ヨ」

「ほほう
」

「あ？
」

「あーダメだよ茶々丸ーッ」

ん？あーそっか、あの日かー転んだら助けてやるっー

おっと、くるか

グキッ

「あ
」

ダッ

「よっと」「ズザー

「あ ありがとうございます」

「大丈夫か、茶々丸、転ぶなんて」

「い いえ問題ありません」

「ハイ」

明日香達がキャッチした物を持ってきた

「ど どうも」

「怪我はしてないよな・・・」

ビクッ

「ちよ
」

「すす すいません 聖夜さん」

「うまうま、大丈夫だ」

「茶々丸、どこか調子でも悪いの？」

ハカセが茶々丸の様子を聞く

「いえ 特にシステムに異常はありません」

機械が気持ちを持つ・・・良い話だよな。皆が可笑しいとか笑いな
がら言ったら、全員、吹っ飛ばしてやるぜ

「んゝ茶々丸ー」

「久々にあなたをバラして点検整備したいから放課後研究室寄って
くれないかな？」

「ハ・・・了解しました」

「ん？エヴァ、帰るのか？あれ？茶々丸は？」

「点検に行った」

「ほおー、俺も見てみたいな」

「物好きだな、行ってこい、私が許可してやるっ」

「どもども」

ダッ

「ようよう、茶々丸」

「あ、聖夜さん」

「あれ？桜先生も来たんですか？」

「面白味」

「物好きですね、桜先生は」

「面白いこと大好きですから」

「ハカセ失礼します」コンコン

「ん？」

「」「ひいっ」「」

「ほおー」

「マッドサイエンティストが出た」

「バラされるーッ」

「……いやいやいや」

「あれー皆さんどうしたんですかー？」

「はびゃ？」

バチバチバチッ！

ドカーン

「すみません・・・ちよーど実験中だったのでー」

「はあ」

どんな実験だよ・・・

「さて　じゃあ早速点検させてもらつよー」

「ハイ」

「ハイ　じゃあ上を脱ぎ脱ぎしましよーかー」

「えっ・・・」

「こ　こじで脱ぐんですか？」

「うん？」

チラッ

ん？こつちを見られた・・・あー、ネギも気になるけどね

年頃の俺だからな、どっか向いてようかな

「ホラ早く」

「ハ ハイ」

何やら、難しい事言ってるけど、理解できる俺が怖い

恥ずかしいねー

恋ねー

そして恋という言葉に、ハカセが壊れた・・・大丈夫か

んで、実験という事に

どんな実験だっけ、忘れた・・・

おおー

「あ あの」

「これは一体どういった」

データ収集ねー

「あの・・・でも・・・」チラッチラッ

ん？意見でも求めてるのか？

「んー茶々丸、似合ってるぞ、てか可愛いな」

あ、本音が出てしまった、まあー本当だし良いか

「おおっ やはり わずかに上昇していますーっ」

「いえ あのっ・・・」

「お次はコレですーっ」

「あっ あの私はロボットですから、このような服は似合わないかと」オロオロ

「関節部分も目立ちますし・・・」

「そんなことないえ茶々丸さん」

「ええ カワイイですよ」

「イイネー、似合ってるじゃないか、思わず・・・」

やば、鼻血が・・・

「！？」

「う・・・うっうっ・・・」

あ、よろけた

「お……！？素晴らしい上昇値です！？グングンと！～これは有効な実験数値です」

「間違いないかも」

「キヤー？」

「あつ……ああ……」

おいおい茶々丸が震えてるぞ、あー鼻血止まらないんだが……

ティッシュ、もらいに店内に入るか……

「これです……っ！！」

ああーこのシーンか

ドンッ

腕が飛んだー

「スゴイよ 茶々丸 これはホンモノかも」

「でも驚いたな、あなたの好きな人物がまさかネ……」

「え…」

ざわ…ざわ…

カイジか！

つて、ああー泣いちゃった…

「ハカセのバカーツ」

うおっ。また飛んだ

「チが…違ってます」

おいおい、大丈夫かマジで

ピーッ

「ちょ、暴走した」

「ええーっ!?!」

「ぼっ…暴走です」

「なっ…」

「ちち違うんでデです…っ」

いや、何が？

「茶々丸さーん!？」

んー俺も手伝ってやるか

よいつしょ

ゴォー

確か右胸だよな

あー暴れてる

「ネギ、後ろに行つて、俺前から突っ込む」

「はい!」

ん、こつち向いたか

「そおい」ポチッ

「あ……」

「大丈夫か?」

「だ……大丈夫ですか茶々丸さん」

「せ……聖夜さん、ネギ先生」

「さて、俺は飯食いに行くかな」

「え？桜先生」

後処理はヤダよ

俺は今回は超包子の近くで寝た

起きたら、ハカセと茶々丸が話してた

そういえば、原作通りに、ネギの事が好きなのかな？

そして、頭の上に傘を・・・

マッドサイエンティスト・・・だな

72時間目 学園祭・・・いい思い出が・・・(後書き)

はい、茶々丸暴走までいきました

結局、茶々丸は誰の事が好きなんでしょうか？

・・・さあー？秘密ー

78時間目 侵略、争奪、ネギま

「ヒーマーだー」

そとを歩いてる、暇だから

ん？あれは・・・

「よう、ネギ」

「あ、聖夜さん」

ん？呼び方変わったな・・・まあいいけど

「桜先生、おはようございます」

「ん、おはよ、仲がいいな本当にお前ら」

「な、何言ってるんですか」

「失礼します聖夜さん、ネギ先生」

「あ・・・茶々丸さん」

「よう、茶々丸」

「あの・・・これマスターの囲碁大会のチラシです」

「あ、どうも」

俺はエヴァに普通に渡されたからな

「あ あの聖夜さん」

「ん？」

「あの……もし……時間があればですが……」
「学祭期間中いつでもいいのですが……私……私と……」

「私と？」

「あ……う……」

「何でもありません」「ドンッ」
「茶道部でおいしいお茶を点ててお待ちしています」

「えーちよー」

「なんだったんだよ……」

「オーイ ネギー」

「格闘大会 もう締め切るらしいでー申し込み行こーや！」

ああーそついえば出させるとかいつてつたな、というか出るだる勝手に

んー確か変身してくるよな

ナギになるんだっけな・・・笑える

お、エヴァだ

「ナギ！？お前どうして・・・」

「成程、格闘大会出る為か・・・」

「（出させるつもりだったが）」

「（ついでにカラかってやるう）」

「よし・・・私もその格闘大会とやらに参加する事にしよう」

「弟子の成長ぶりが気になるからな」

あー俺どうしようかなー、出ちゃおうかな・・・

「貴様が この最弱状態の私に勝てなければ、学園最終日その姿で私に一日付き合ってもらおうか」

「聖夜、お前は、私が暇な時、付き合え」

「まあいいけど、暇だし」

俺も格闘大会出るかなー適当なところで止めるけど

「あら、桜先生、丁度良かった、学園長先生が明日来てほしいって」

「ん？学園長室か？」

「いえ、早朝に世界樹前広場に来てほしいって」

「判りました」

次の日ナウ

「んーなんだっけなー」

あ、ネギと刹那だ

「おーい、ネギと刹那ー」

「あ、聖夜さん」

「桜先生」

「俺も、学園長に呼ばれたんだ」

「何の話でしょうかね？」

「さあー俺もわからん」

「あれ？おかしいな・・・」

「ん？」

「どこかしました？」

「学祭前日なのに広場に人が一人もいないなんて」

「あれ……」

「あれは……？」

「お……ネギ君と聖夜君」

「待ったぞ」

「へ」

ああーあれかーネギが驚いてる

「あ あの一この方たちは」

「うむ、ネギ君と聖夜君には、まだ紹介していなかったの」

魔法先生達でしょ知ってます

「君が聖夜君か」

「ども」

「こんにちは、聖夜君」

「どもども」

「はー広い学園内に、こんなに魔法使いの人たちがいたなんて」

「世界樹伝説をしつとるかの」

「知ってます、願がかなうとか」

「それがのー真実なんじゃマジで願いが叶ってしまうんじゃよ」

「22年に1度じゃがな」

へーエヴァ達と告白でもしちゃうかなー、冗談だけど

「告白に関する限り、その成率は120%!!!!まさに呪い級の威力じゃよ」

いろんな話をしてて

「誰かに見られてます」

グラサンが

パチン

ポヒュッ

無詠唱呪文か・・・

というか、相坂・・・なにしてるんだよ

あ、ロボットの方にあたった

追手が行った

「以上解散」

告白ねー俺はいないけど、フラグ立てれてないし

ネギ問題ありまくり

俺は傍観してるけどね、暫く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8464y/>

魔法使い聖夜！

2011年11月26日15時50分発行